

山本泰次郎先生のこと（1）

山本先生が亡くなられて早ひと月になる。先日も奥様をお訪ねして応接間にすわっていると、今にも先生がいつものように「いらっしゃい」と言いながら入ってこられるような気がした。部屋の飾り棚に先生のご遺骨と写真が置かれているが、この写真は5、6年前のものだそうだが、非常に先生らしい、よく撮れたもので、じっと見つめていると、いつものように先生がいろいろと話を下さっているような気がした。なにかまだ先生が生きておられるような気がしてならないが、先生がもう此の地上においでにならないことは確かなことなのだ。そう思うと実に寂しい。

「山本先生のこと」と言っ、別に先生の思い出話を書くつもりではない。そんなことをしたら、およそ前のみを見つめて後をかえりみることをされなかった先生に、お叱りをうけるであろう。先生からお教えいただいたこと、特に信仰に直接関係あることを、思い出すままにボツボツ綴ってみたい。

思い出話でないと言いながら、早速そのような話をするようになって気がひけるが、第1回は話の順序で、先生と私の関係のようなことを書いてみたい。話が個人的になって恐縮だがお許しいただきたい。

私が先生の伝道月刊誌「聖書講義」の読者になったのは、1950年6月号、その66号からである。その頃私は、「キリストの教会」というある福音派の教会に属し、その教派の牧師養成のための聖書学校に在学していた。その学校の先輩に旧友飯島正久兄（現港キリスト教会牧師、「牧歌」誌主筆）がおられて、私は同兄から紹介勸奨されて、先生の「聖書講義」を購読するようになったのである。

「聖書講義」は1934年9月に創刊されたが、先生のご病気のため再三休刊、復刊をくり返し、ついに1942年2月、第60号で一たん廃刊となった。その後先生は北海道帯広に疎開されたが、飯島兄はそこ

で先生を知られたのであった。1948年秋、先生は北海道滞在中に得た信仰の収穫を携えて帰京され、50年1月に「聖書講義」を復刊された。私はその第6号目から読者になったわけである。

はじめは読んでもわからず、というよりむしろ反撥を覚える方が多かったように記憶している。しかしいつごろからか、牧師職とか（わたしは1949年11月に正式に馬橋キリストの教会の牧師になった）、伝道ということに疑問を感じるに従って、「聖書講義」を真剣に読むようになっていったようである。それには飯島兄の友情と指導が大いに与って力があつた。

先生に初めてお会いしたのは1951年の暮のことであつたと思う。馬橋から歩いて天沼の先生のお宅に伺った。先客が帰られるところで、私も玄関先ですぐに失礼したが、あとから考えると、その先客はのちにしばしばご一緒して先生をお訪ねするようになった小林忠雄さんであつたらしい。そして52年の5月には、馬橋キリストの教会において、先生に「内村鑑三先生から学んだことども—アメリカの排日移民法事件について」と題する講演（教文館「内村鑑三の根本問題」所収）をしていたから、私は急速に先生のキリスト教に傾斜していったのであつた。「先生のキリスト教」とは、私がそれまでアメリカ人宣教師から教えられていた教義の信仰ではなく、人生の体験に基づく事実の信仰であり、形式と規則にしばられた律法主義キリスト教でなくして、「教会あるよし、なくもよし」の、自由な、霊的・福音的キリスト教である。

私共は1950年11月結婚したが、間もなく妻富子は結核に冒され療養しなければならなくなった。その時山本先生が野村実先生を紹介して下さい、私共は52年6月のある日、東村山の野村先生をお訪ねして診ていただき、家内はその秋から白十字サナトリウムに入院して療養するようになった。先生は折々にわざわざ東村山まで家内を見舞って下さった。ある時には野村先生のご好意でお借りした院長住宅で心のこもった、楽しい祈祷会を開いて下さったりしたのであつた。こうして私共は、

私的な面でも先生のお祈りの中に加えていただき、事あるごとに先生のご厚情に与るようになったのである。因みに、家内はその後結局十年近くの療養を余儀なくされたが、その間野村先生のご教導によって社会福祉に目を開かれ、病気が回復してからはソーシャル・ワーカーとして先生のもとで働き、以来こんにちまでずっと福祉の仕事をつづけている。私共は山本先生を通して野村先生にお近づきになれたことを、私共の人生におけるもう一つの貴重な出会いとして深く感謝している。

私の牧する教会で先生に内村の話をしていただいた時（前述）、先生は私に「君、こんなことをして大丈夫ですか」と言われた。愚鈍な私は先生の言われたことの意味がわからず、いい話をしてもらうのに何の問題もあるはずがないと単純に考えていた。そして飯島兄と共に「東京聖書会」という勉強会を作って、先生のお出ましを願い、同志とともに一所けん命聖書を勉強した。その結果私はどうしても「教会」の信仰と伝道に疑問をもたざるを得なくなり、1955年1月、「教会か、福音か」と題して説教し、宣教師と教会員の前に以後教会ではなく福音（無教会信仰）に生きることを宣言した。そして此の信仰をもって教会の経営を試みたいので3年の猶予をほしいと願ったが、大方の教会員と宣教師の容れるところとならず、約1年後の翌56年4月について教会の牧師を辞任したのである。私はその時はじめて先生が「大丈夫ですか」と言われた意味がわかった。私が先生から教えられ、ついにそれに生きるようになったキリスト教は、ある意味では辛い、深刻な、実に貴いキリスト教であった。宣教師と教会の人たちに異端とされたのも、無理もない。

この時を初めとして、それから二度三度、私は生活問題を含めて人生の分岐点に立たされたが、その都度、私共夫婦は天沼に先生をお訪ねして、先生の助言を仰いだ。そうした時の先生のご忠告はいつも具体的で、实际的で、常識的で、しかも問題の根本を衝く徹底的なものであった。そしていつも必ず、「奥さんはどう思いますか」と家内の意見を聞かれるのであった。しかし先生は決して「こうせよ」とか「ああすべきであ

る」というようなことを言われなかった。どこまでも人の自由を尊重されるのである。私は性来優柔不断でなかなか決断のできない人間であるので、先生はどんなにかはがゆく思われたことであろう。しかしそれにもかかわらず、私がこと信仰に関する限り何とかまちがいのない選択をしていくことができたのは、一と重に先生の（むしろ無言の）ご教導によるものである。有難いことだと思う。

いま先生のご忠告が实际的と言ったが、先生は実にすぐれた実務家であられた。それは先生の内村全集の編集を見れば一目瞭然であろう。先生は一面ではおよそ此の世とは何の関わりもないような生活をしておられたにもかかわらず、実に世の中のことを何でもよく知っておられた。私が先生のお手伝いをして内村全集の索引を作った時も、あるいは「続一日一生」を編集したときも、内村の英文全集の注を書いた時も、およそ自分では索引を使って本を読むなどということを知らなかった私は、それこそカードのとり方からは始めてありとあらゆることを先生から教えていただいたのであった。

先生に教えていただいたことは、以上のような仕事の上での実務ばかりではなかった。いやもっと大切なことは勉強の仕方であった。かつて先生は私共にギリシャ語を学ぶ精神として「三つの愛」を教えてくださいました。それは第一に“Love your teacher.”第二に“Love your textbook.”そして第三“Love your Greek.”である。そして先生はその愛し方を教えて下さったのである。教科書を愛するとは、その教科書を表紙からウラ表紙まで全部を自分のものとする。ギリシャ語を愛するとは、自分の目と耳と手と足のすべてをもって勉強することであると。それで私共は一つの教科書を徹底的に勉強した。ギリシャ語の変化を目でよみ、耳で聞き、手で書き、歩く間も暗記した。そのおかげで私共はみな、今でも何とか自分で聖書を学んでいる。

ふつう無教会で先生と弟子という時は、弟子は先生の集会の会員である。しかし私は一度も先生の日曜の集まりに出たことはない。どこまで

も「聖書講義」誌を通しての弟子である。（先生はいつも私を信仰の友人として遇して下さいましたが）もちろん以上述べたように、私は幸いにも先生に親しくしていただいて聖書の勉強のことをはじめ実にたくさんのことを教えていただいた。私共夫婦は個人的にも実に大きなご恩顧をいただけてきた。それにもかかわらず、私が先生から教えていただいた最大のこと、私が先生に習った一番大切なことはイエス・キリストの福音以外の何ものでもない。結局私がこの29年間、先生からくり返しくり返し教えられ学んできたことは、「キリストとその十字架につけられ給いしこと」と、「キリストが私のうち生きて下さることを信じる信仰」だけである。

先生がおられなくなったことは悲しく、寂しい。しかし私は先生が天国に行かれたことによって、いよいよこれから先生から本当の意味で深く正しく学ぶことができるような気がしている。悲しみの中であって、私の心は希望に溢れている。

（所載）「テコア通信」第98号

1979年5月